



石を金に変える技術

中国の神仙譚をもとにした面白いエッセーを読んだので紹介しよう。

＊

仙人世界のトップに立っているのは、呂洞賓という人です。この御仁、偉いことは偉いのですが、酒と女が大好きで、おまけに喧嘩っ早いときています。そんなところが、中国の民衆に慕われている大きな理由でもありますが、この呂洞賓お得意の術が、「点石成金」一石に触れて金と成すという術なのであります。

ある日のこと、いつものように飲み屋で飲んだくれていた呂洞賓、店を出る段になって、財布の中身がからっぽであることに気づきました。そこでかれは、足もとにころがっていた石ころに、くだんの術をかけて金貨に変え、支払いを済ませてしまったのでした。

これを見ていたある神様が、洞賓にたずねました。

「さっきの金貨だけど、あれは永遠に金貨のままなのかね？」

洞賓は答えて、

「いや、五〇〇年たったら、またもとの石に戻るんだけどね」

これを聞いた神様は、こう言いました。

「君は、眼の前のことばかり考えていて、五〇〇年後、それを手にした者が、どれほどつらい目にあうのかを考えないのかい？」

聞いて呂洞賓はハッと悟り、その後、仙人たちのあいだで、石を金に変える術は使用禁止になったとのことでした。

石を金に変えるというのですから、現代科学の目で見たら、物質の分子や原子に手を加えるような、とてつもない術なのでしょう。

しかしながら、そうすることで、いま目の前にある美酒は楽しめるけれども、五〇〇年後のだれかは、手にした金貨が石に変ずるのをまのあたりにすることになる。その結果、かれは絶望と苦痛とを味わうことになるかもしれない…。呂洞賓はそのことに想致して、これを禁じたというわけでありました。

この、たあいのない仙人のエピソードから、もはや魔法や仙術なみになり、人間たちの手に負えなくなった技術—そのために、取り返しのつかない損害と悲しみを体験したにもかかわらず、それでもあえて使いつづけようとしている、ある種の「石を金に変える」科学技術のことを連想してしまうのは、私だけでしょうか。

いま、それによって楽ができて、五〇〇年後の人間に巨大な負債を残す、禍々しき術。それを、一見だらしのない仙人のリーダーが、みずからの想像力の欠如をしっかりと反省しつつ、きちんと禁じたというあたり、なかなか哲学のあるはなしではないかと思うのであります。（「学士會会報」906号、2014.5.1）

＊

筆者は北海道大学大学院教授の武田雅哉さん。「石を金に変える」術が何を連想させるかは明らかだろう。小論文入試の際、こういうエピソードをうまく導入部などに使えると、グッと引き立つことになる。

小論文は、書くべきことが自分の中に蓄えられていなければ、イイものが書けるはずがない。ニュースや新聞を通して、自分が進学したい分野の課題は何なのか、コツコツと自分の中に蓄えたいものである。